

# 明暗評釈 八

第十一章〜第十八章

鳥井正晴

## 第十一章

### 初出

大正五年（一九一六年）六月五日・「東京朝日新聞」

大正五年（一九一六年）六月四日・「大阪朝日新聞」

### 評釈

①「彼は、談話の途中でよく拘泥つた。さうしてもし事情が許すならば、何処迄も話の根を掘ちつて、相手の本意を突き留めやうとした。遠慮のために其所迄行けない時は、黙つて相手の顔色丈を注視した。其時の彼の眼には必然の結果として何時でも軽い疑ひの雲がかつた。それが臆病にも見えた。注意深くも見えた。又は自衛的に慢ぶる神経の光を放つかの如くにも見えた。最後に、「思慮に充ちた不安」とでも形容して然るべき一種の匂も帯びてゐた。」

(一)、①、第百二十四章に、次の如く、ある。

△此場を何う切り抜けたら可いか知らといふ思慮の悩乱でもあつた。お延は此一瞥をお秀に与へた瞬間に、もう今

日の自分を相手に握られたといふ気がした。▽

②、第四百四十四章に、次の如く、ある。

△彼女は何故だか病院へ行くに堪へないやうな気がした。此様子では行つた所で、役に立たないといふ思慮が不意に彼女に働らき掛けた。

「夫の性質では、とても卒直にこの手紙の意味さへ説明しては呉れまい」▽

③、第四百四十七章に、次の如く、ある。

△彼女は前後の関係から、思慮分別の許す限り、全身を挙げて其所へ拘泥らなければならなかつた。それが彼女の自然であつた。▽

(二)、「思慮に充ちた不安」という表現の、云わんとするところは、大事である。近代の「自意識」の孕む「重さ」、「自閉性」、そしてその「始末の悪さ」を、具体の「場」に云う、表現である。

①、北山正迪の、△漱石「私の個人主義」について——『「明暗」の結末の方向——』(『文学』第45巻第12号、岩波書店、昭和五十二年(一九七七年)十二月)に、次の見解が、ある。

△漱石が『三四郎』の頃言っていたという無意識の偽善は近代の自我、自意識の本質的な性格であるが、内も外もない自覚ということは、愛については絶対の愛、愛の成就をいうものであろう。無意識の偽善という自意識の持つ本質的な不安を、漱石は『明暗』では「思慮に充ちた不安(十二)」としているのであつて、勿論それは『彼岸過迄(明45・1・2—4・29)』の「恐れる男」と別ではない筈である。(P.19)▽

②、津田の、この「思慮に充ちた不安」は、清子の、「たゞ微笑した丈であつた。其微笑には辯解がなかつた。」(第百八十四章)と、明らかに「対称」をなすものである。「辯解のない微笑」は、「思慮に充ちた不安」のアントニム(対

義語)である。

北山正迪の、△漱石と『明暗』▽(『文学』第34巻第2号、岩波書店、昭和四十一年(一九六六年)二月)に、次の見解が、ある。

△『明暗』に於ける諸人物の葛藤は「弁解のない微笑」を見せる清子を突然理由もなく失った「思慮に充ちた不安」である津田に中心がおかれている。それは自己の实在性の喪失に気づいた自我の設定であらう。津田はその故に清子と相会わねばならぬ必然性を自己自身のうちにもっている。憶測が許されれば併しその間に恋愛は成立し得ない。寧ろその出会いを通してお延との紐帯が深まり、両者の自己変容がそれに伴ってゆかなければ清子の本質が崩壊するであらう。自己の自由性を、考えるということに見出し、絶えず真実の連帯を希求している近代的自我のもつ、本質的なその宿命への鋭い査察がここにはあるのである。漱石はここでは「有る」ということへの問も問うているのであるが、自我に於ける自由性への希求も連帯性への希求も「有る」ということへの希求の変形であるならば、「思慮に充ちた不安」である津田の自我の追求は自らその問題を明るみに導かなければならない筈である。(P.8)▽

②「細君は津田の前に置いてお延の様子を形容する言葉を思索するらしかつた。津田は多少の好奇心をもつて、それを持ち受けた。

「まあ老成よ。本当に伶俐な方ね、あんな伶俐な方は滅多に見た事がない。大事にして御上げなさいよ」  
(一)、第四百四十二章に、次の如く、ある。

△夫人は、(中略) 教へるやうに津田に云つた。

「あの方は少し己惚れ過ぎてゐる所があるのよ。それから内側と外側がまだ一致しないのね。上部は大変丁寧で、お腹の中は確かりし過ぎる位確かりしてゐるんだから。それに利巧だから外へは出さなければいけません、あれで中々慢気が

多いのよ。だからそんなものを皆んな取つちまはなくつちや……」▽

## 第十二章

### 初出

大正五年（一九一六年）六月六日・「東京朝日新聞」  
大正五年（一九一六年）六月五日・「大阪朝日新聞」

### 評釈

①「彼はある意味に於て、此細君から子供扱ひにされるのを好いてゐた。それは子供扱ひにされるために二人の間に起る一種の親しみを自分が握る事が出来たからである。（中略）」

同時に彼は吉川の細君などが何うしても子供扱ひにする事の出来ない自己を裕に有つてゐた。彼は其自己をわざと押し藏して細君の前に立つ用意を忘れなかつた。」

（一）、第百十七章に、次の如く、ある。

「彼女は、飽く迄素直に、飽く迄閑雅な態度を、絶えず彼の前に示す事を忘れないと共に、何うしても亦彼の自由にならない点を、同様な程度でちゃんと有つてゐた。▽

「子供扱ひにする事の出来ない自己」「何うしても亦彼の自由にならない点」も、津田とお延は、共有している。

②「医者の専門が、自分の病氣以外の或方面に属するので、婦人などはあまり其所へ近付かない方が可いと云はうとした津田は、少し口籠つて躊躇した。」

(一)、①、第二十九章に、次の如く、ある。

△小林は追ひ掛けて、其病院のある所だの、医者の名だのを、左も自分に必要な知識らしく訊いた。医者の名が自分と同じ小林なので「はあれぞやあの堀さんの」と云つたが急に黙つてしまつた。堀といふのは津田の妹婿の姓であつた。彼がある特殊な病氣のために、つい近所にある其医者の許へ通つたのを小林はよく知つてゐたのである。▽

②、第十七章に、次の如く、ある。

△彼が去年の暮以来此医者の家で思ひ掛なく会つた二人の男の事を考へた。

其一人は事実彼の妹婿に外ならなかつた。此暗い室の中で突然彼の姿を認めた時、津田は吃驚した。そんな事に対して比較的無頓着な相手も、津田の驚ろき方が反響したために、一寸挨拶に窮したらしかつた。

他の一人は友達であつた。是は津田が自分と同性質の病氣に罹つてゐるものと思ひ込んで、向ふから平氣に声を掛けた。▽

③、第九十一章に、次の如く、ある。

△器量望みで貰はれたお秀は、堀の所へ片付いてから始めて夫の性質を知つた。放蕩の酒で臟腑を洗濯されたやうな彼の趣も漸く解する事が出来た。▽

(二)、十川信介の、△注解▽〔漱石全集〕第11巻、岩波書店、平成六年(一九九四年)十一月)に、次の注解が、ある。

△医者<sup>の</sup>の専門が……或方面に属する 「十七」に、彼等(患者)は「寧ろ華やかに彩られたその過去の断片のために、急に黒い影を投げかけられるのである」とあるように、ここで、「或方面」は梅毒などの性病を指している。当時の開

業医は次第に専門的に分化しつつあったが、「皮膚梅毒科」と「肛門科」とは、ほとんどの場合兼業であった（『読売新聞』大正四年十一月二十七日）。新聞や雑誌には痔疾の治療を行なう皮膚病・性病専門医の広告が頻出する。（P.699）〈津田が、入院手術することになる、「小林医院」は、「性病」を専門とする、医院である。

「暗い控室の中で、静かに自分の順番の来るのを待つ」、「此陰気な一群の人々」（第十七章）という待合風景の描写に、「性病院」であることが強調されている。

## 第十三章

### 初出

大正五年（一九一六年）六月八日・「東京朝日新聞」  
大正五年（一九一六年）六月六日・「大阪朝日新聞」

### 評釈

①「彼は広い通りへ来て其所から電車へ乗った。掘端を沿ふて走る其電車の窓硝子の外には、黒い水と黒い土手と、それから其土手の上に蟠まる黒い松の木が見える文であつた。

車内の片隅に席を取つた彼は、窓を透して此さむぎむしい秋の夜の景色に一寸眼を注いだ後、すぐ又外の事を考へなければならなかつた。彼は面倒になつて昨夕は其儘にして置いた金の工面を何うかしなければならぬ位地に

あつた。彼はすぐ又吉川の細君の事を思ひ出した。」

(一)、津田は、「秋の夜の景色に一寸眼を注いだ」だけで、「黒い水」と、「黒い松の木」は、今回は、津田の「意識」を掠めない。

(二)、「黒い水」と、「黒い松の木」という、同じ「秋の夜の景色」の中を、津田を乗せた馬車が、のちに（最終回近く 第七十二章で）、進むことになるであろう。

第七十二章に、次の如く、ある。

△一方には空を凌ぐほどの高い樹が聳えてゐた。星月夜の光に映る物凄しい影から判断すると古松らしい其木と、突然一方に聞こえ出した奔流の音とが、久しく都会の中を出なかつた津田の心に不時の一転化を与へた。彼は忘れた記憶を思ひ出した時のやうな気分になつた。

「あゝ世の中には、斯んなものが存在してゐただつて、何うして今迄それを忘れてゐたのだろう」

不幸にして此述懐は孤立の儘消滅する事を許されなかつた。▽

今回は、「此述懐は孤立の儘消滅する事」はなく、津田の「意識」の内側に浸透する。物語の第二部、旅に出てからの津田には、明らかに「意識」の変化が訪れようとする、「件」である。

②「電車を下りて橋を渡る時、彼は暗い欄干の下に蹲。踞。ま。る。乞。食。を見た。其乞食は動く黒い影の様に彼の前に頭を下げた。彼は身に薄い外套を着けてゐた。季節からいふと寧ろ早過ぎる瓦斯煖炉の温かい燄をもう見て来た。けれども乞食と彼との懸隔は今の彼の眼中には殆んど入る余地がなかつた。彼は窮した人のやうに感じた。父が例月の通り金を送つて呉れないのが不都合に思はれた。」

(一)、①、第二十七章に、次の如く、ある。

△「由雄さんは一体贅沢過ぎるよ」

学校を卒業してから以来の津田は叔母に始終斯う云はれ付けてゐた。

(中略)

「えゝ少し贅沢です」

「服装や食物ばかりぢやないのよ。心が派出で贅沢に出来上つてるんだから困るつていふのよ。始終御馳走はないかくつて、きよろ／＼其所いらを見廻してる人見た様で」

「ぢや贅沢所か丸で乞食ぢやありませんか」

「乞食ぢやないけれども、自然真面目さが足りない人のやうに見えるのよ。人間は好い加減な所で落ち付くと、大変見つとも好いもんだがね」▽

②、第七十四章に、次の如く、ある。

△婦人は温泉烟の中に乞食の如く蹲踞る津田の裸体姿を一目見るや否や、一旦入り掛けた身体をすぐ後へ引いた。▽  
乞食は、寒さに震えているであろう。対し、津田は、もう「薄い外套を着けて」いる。一定の給料を会社から貰いながらも、今月、父からの「送金」のないことを、津田は、「不都合」に思う。津田には、「乞食と彼との懸隔は今の彼の眼中には殆んど入る余地」がない。自分の事以外には眼の行かない、「自己中心的」な、津田の「有り様」が、「乞食」との対比に、鮮明である。



## 第十四章

### 初出

大正五年（一九一六年）六月九日・「東京朝日新聞」  
大正五年（一九一六年）六月八日・「大阪朝日新聞」

### 評釈

①「咄嗟の場合津田はお延が何かの力で自分の帰りを予感したやうに思つた。けれど其訳を訊く気にはならなかつた。訳を訊いて笑ひながらはぐらかされるのは、夫の敗北のやうに見えた。

彼は澄まして玄關から上へ上がった。」

(一)、①、第百八十六章に、次の如く、ある。

△「だから其事実を聴かせて下されば可いんです」

「事實は既に申し上げたぢやないの」

「それは事實の半分か、三分の一です。僕は其全部が聴きたいんです」

「困るわね。何といつてお返事をしたら可いんでせう」

「訳ないぢやありませんか、斯ういふ理由があるから、さういふ疑ひを起したんだつて云ひさへすれば、たつた一口で済んぢまう事です」

今迄困つてゐたらしい清子は、此時急に腑に落ちたといふ顔付をした。

「あゝ、それがお聴きになりたいの」

「無論です。先刻からそれが伺ひたければこそ、斯うして執濃く貴女を煩はせてゐるんぢやありませんか。それを貴女が隠さうとなさるから——」▽

②、第百八十七章に、次の如く、ある。

△津田は思ひ切つて、一旦捨てやうとした言葉を又取り上げた。

「それで僕の訊きたいのはですね——」

清子は顔を上げなかつた。津田はそれでも構はずに後を続けた。

「昨夕そんなに驚ろいた貴女が、今朝は又何うしてそんなに平気でゐられるんでせう」

清子は俯向いた儘答へた。▽

③、第百八十八章に、次の如く、ある。

△津田はつい「此方でも其訊を訊きに來たんだ」と云ひたくなつた。然し何にも其所に頓着してゐないらしい清子の質問は正直であつた。▽

津田は、「其訊を訊き」たい。その「訊」「理由」を、求めないではいられない人間である。

しかし、対する相手が、お延(第十四章)と、清子(第百八十六章、第百八十七章、第百八十八章)では、訊く方の津田

自身の側にも、こうも違つた「態度」が、必然とされてしまう。

(二)、北山正迪の、△漱石「私の個人主義」について——「明暗」の結末の方向——▽〔文学〕第45巻第12号、岩

波書店、昭和五十二年(一九七七年)十二月)に、次の見解が、ある。

△現在の『明暗』の終りの数章には、どこまでも理由を求めないではいられない男と、理由を外れた場所、何故なしのところからそれに応じている女の對話ということが際立っているのである。(P.26)▽

- ②「彼が結婚後家計膨張といふ名義の下に、毎月の不足を、京都にゐる父から填補して貰ふ事になつた一面には、益暮の賞与で、その何分かを返済するといふ条件があつた。彼は色々な事情から、此夏その条件を履行しなかつたために、彼の父は既に感情を害してゐた。」
- (一)、第七章の、評釈①、参照。

## 第十五章

### 初出

大正五年（一九一六年）六月十日・「東京朝日新聞」  
大正五年（一九一六年）六月九日・「大阪朝日新聞」

### 評釈

- ①「西洋流のレターペーパーを使ひつけた彼は、机の抽斗からラエンダー色の紙と封筒とを取り出して、其紙の上へ万年筆で何心なく二三行書きかけた時、不図気がついた。」

(一)、①、第三十九章に、次の如く、ある。

△「病院へ持つて行くものを纏めなくつちや」

津田の言葉と共に、お延はすぐ自分の後にある戸棚を開けた。

「此所に拵へてあるから一寸見て頂戴」

(中略) 鞆の中からは、楊枝だの歯磨粉だの、使ひつけたラエンダー色の書翰用紙だの、同じ色の封筒だの、万年筆だの、小さい鉄だの、毛抜だのが雑然と現はれた。▽

②、第二百二十二章に、次の如く、ある。

△彼は床の上に置かれた小型の化粧箱を取り除けて、其下から例のレターペーパーと同じラエンダー色の封筒を引き抜くや否や、すぐ万年筆を走らせた。▽

③、第十九章に、次の如く、ある。

△お延は手早く包紙を解いて、中から紅茶の罐と、麵麩と牛酪を取り出した。

「おや／＼是召しやがるの。そんなら時を取りに御遣りになれば可いのに」

「なに彼奴ぢや分らない。何を買つて来るか知れやしない」

やがて好い香のするトーストと濃いけむりを立てるウーロン茶とがお延の手で用意された。

朝飯とも午飯とも片のつかない、極めて単純な西洋流の食事を済ました後で、津田は独りごとのやうに云つた。▽

④、第四百十一章に、次の如く、ある。

△ことに自己の快楽を人間の主題にして生活しようとする津田には滅多にない逃へ向きの機会であつた。▽

津田は、自己の「嗜好」「価値観」が、決まっている。あくまで「西洋的」であり、「ナウ」い。「自己の快楽を人間の主題にして生活しようとする津田」の、西洋流の「趣向」が、使いつけた「ラエンダー色のレターペーパー」と、「ラエンダー色の封筒」に、象徴されている。

第十五章、小説の、「第二日目」(木曜日)が、終わる。

## 第十六章

### 初出

大正五年（一九一六年）六月十一日・「東京朝日新聞」  
大正五年（一九一六年）六月十日・「大阪朝日新聞」

### 評釈

第十六章、小説の、「第三日目」（金曜日）が、始まる。

①「おい君、お父さんは近頃何うしたね。相変らずお丈夫かね」  
振り返つた津田の鼻を葉巻の好い香が急に冒した。

「へえ、有難う、お陰さまで遠者で御座います」

「大方詩でも作つて遊んでるんだらう。気楽で好いね。昨夕も岡本と或所で落ち合つて、君のお父さんの噂をしたがね。（中略）」

（一）、第九章の、評釈②、参照。

## 第十七章

### 初出

大正五年（一九一六年）六月十三日・「東京朝日新聞」  
大正五年（一九一六年）六月十一日・「大阪朝日新聞」

### 評釈

①「此陰気な一群の人々は、殆んど例外なしに似たり寄つたりの過去を有つてゐるものばかりであつた。彼等は斯うして暗い控室の中で、静かに自分の順番の来るのを待つてゐる間に、寧ろ華やかに彩られたその過去の断片のために、急に黒い影を投げかけられるのである。」

(一)、津田が、入院加療しようとする医院は、「性病院」である。

第十二章の、評釈②、参照。

(二)、加藤二郎の、△『明暗』論——津田と清子——▽『文学』第56巻第4号、岩波書店、昭和六十三年（一九八八年）四月）に、次の見解が、ある。

△『明暗』に於て漱石は性病院というものを作品の主な場所として設定しており、（中略）近代の文学に於て性病院という様な場所が文学の主な場とされるといふ様なことがあつたであろうか。例えば結核療養所が文学の場とされ、そこから堀辰雄等を典型とする特有の抒情文芸が産み出されるといふ様なことはあつた。漱石に於ても結核は、『明暗』の津田にあつても彼の痔疾の「結核性」の有無が極度の畏怖の対象とされているといふ様な事情等はある。

併し漱石は結核を作品の主な主題とすることはなく、『明暗』の場合は性病院という様な所に置かれたのである。このことは漱石の意識に、小林のシニシズムの所謂「一体芸者と貴婦人とは何所が何う違ふんだ」とされた様な、そうした風俗を現出しつつあった大正期に入った近代日本総体のいわば生理への問、それがあつたことを告げるものであろう。人間の開かれた関係性への問が漱石の根本の問題とされたこと、そのことが『明暗』の場ともかかわる筈であり、結核の治癒可能というその後の病理史の展開は、結核を文学の主題としなかつた漱石の選択が結果的にも正しかつたことを語るものと言える。堀辰雄等の文学を可能としたもの、従つてその抒情の性格を規定したものが、結核という病そのものの社会的な隔離性乃至は閉鎖性であつたこと、そのことが思われるべきである。『明暗』の場としての性病院、近代の日本社会の生理といつても、それは無論単に限定的な意味でのそれということではない。政治的・経済的・文化的その他様々の人間的営為の総体に於ける、象徴性を帯びたものとしてのそれということであり、そうした課題性を津田・お延・清子・小林等々の人物の相互性の内に問おうとした作品『明暗』の未完結は、寧ろそのこと自体に於て、近・現代の日本の歴史的社会的な時熟と成熟とへの試金石として、その存在意義を發揮し続けて来たとも言える様に思われる。(P.122)〈

②「津田は長椅子の肘掛に腕を載せて手を額に中てた。彼は黙禱を神に捧げるやうな此姿勢のもとに、彼が去年の暮以来此医者の家で思ひ掛なく会つた二人の男の事を考へた。」

(一)、①、第七十八章に、次の如く、ある。

△彼女は手紙を巻いた。さうして心の中でそれを受取る父母に断つた。

「この手紙に書いてある事は、何処から何処迄本当です。嘘や、気休めや、誇張は、一字ありません。(中略)私があなた方を安心させるために、わざと欺騙の手紙を書いたのだといふものがあつたなら、其人は眼の明いた盲人

です。其人こそ嘔吐です。どうぞ此手紙を上げる私を信用して下さい。神様は既に信用してゐらっしゃるのですから」お延は封書を枕元へ置いて寐た。▽

前作『道草』と比較して、『明暗』には、「神」という表現は、少ない。

『明暗』に於いて、「神」という言葉が現れるのは、津田(第十七章)に一回と、お延(第七十八章)に一回の、合わせて、二回のみである。

②、△『道草』から『明暗』へ▽(『シンポジウム』日本文学14『夏目漱石』、学生社、昭和五十年(一九七五年)十一月)に、佐藤泰正の、次の発言が、ある。

△佐藤 高木さん、いかがでしょうか。神という問題が『明暗』で二か所だけ出ます。一つは、例の医院の待合室で、神に祈るようなうつつむいた姿でいる津田。もう一つは、お延が両親に書く手紙で、私と津田は一生懸命、幸福にやっていますよ。この、手紙を上げる私を信用して下さい。神様はすでに信用していらつっしゃるのですからという、あそこで神を持ち出す漱石というのに、私はお延に対するいとしみを感じますね。

高木 非常にすなおに出しましたね。

佐藤 津田というのは、あとで闇の中をひとり温泉場に向かう、あの深い不安の場面が出てくるのですけれども、病院の待合室で神に祈るがごときというのは、暗い舞台で、そこだけスポットライトがすうつと当たっている。まわりは深い闇、お延は明るい書き割りの前で一生懸命働いているけなげさ、限界はあるけれども、そういう明暗とか神の出てくるこのふたつは非常に対照的ですね。あれを教えておきまして、学生もあの二つの対照に目をとめまして、なるほどなと……。(P.202)▽

③「他の一人は友達であつた。是は津田が自分と同性質の病氣に罹つてゐるものと思ひ込んで、向ふから平氣に声を



掛けた。彼等は其時二人一所に医者セックスの門を出て、晩飯を食ひながら、性セックスと愛ラブといふ問題に就いて六づかしい議論をした。」

(一)、「性」に、「セックス」と、ルビが振られている。もう一箇所、第二十五章にも、次の如く、ある。

△四十の上をもう三つか四つ越した此叔母の態度には、殆んど愛想といふものがなかつた。其代り時と場合によると世間並の遠慮を超越した自然が出た。其中には殆んど性セックスの感じを離れた自然さへあつた。津田は何時でも此叔母と吉川の細君とを腹の中で比較した。さうして何時でも其相違に驚ろいた。同じ女、しかも年齢のさう違はない二人の女が、何うして斯んなに違つた感じを他に与へる事が出来るかといふのが、第一の疑問であつた。

「叔母さんは相変らず色気がないな」

「此年齢になつて色気があつちや氣狂だわ」▽

(二)①、荒正人の、△注解▽『漱石文学全集』第9巻、集英社、昭和四十七年(一九七二年)十二月)に、次の注解がある。

△愛に「ラブ」と振り仮名を付けることは、明治時代から珍しくなかつたが、性に「セックス」と振り仮名を用いるのは、当時としては新しかった。(中略) 「性セックス」は、大江健三郎が「性セックス」とフランス語表記を使ったときに

似て、新鮮な感じを与えた。なお、当時の思想としては、性と愛を結びつけることは余り行なわれていない。(P.28)▽

②、十川信介の、△注解▽『漱石全集』第11巻、岩波書店、平成六年(一九九四年)十一月)に、次の注解がある。

△なお原稿では、この部分の表記はまず「セックスとラブ」と書かれ、次いで左側に漢字が添えられて片仮名が傍訓に変えられている(図)。「セックス」というルビは、たとえば坪内逍遙『当世書生氣質』(明治十八年)に「情慾セックス」、

野上白川「結婚の進化」(『中央公論』大正四年十月)に「性セックス」などがある。(P.702)▽

(三)、「道草」から「明暗」へ▽(「シンポジウム」日本文学14「夏目漱石」、学生社、昭和五十年(一九七五年)十一月)に、相原和邦の、次の発言が、ある。

△相原 愛ということばだけで「明暗」をつかまえていくと、逃げるものがある。確かに漱石文学の一貫したテーマとしての愛の問題も出ているけれども、「道草」あたりからさらに生理の問題が出てきます。「道草」のお住というのは、愛の希求の対象であると同時に、出産とか、病気とかいう場面で彼女の持つ生理的なものが見つめられていますね。

平岡 「行人」でセックスの問題が出ている。

相原 「手触を挑むやうな柔らかさ……」。あそこらから出てきて、「明暗」では津田が議論するとき、「セックスとラブの問題」……。

平岡 それが関、清子の夫なんです。

相原 ラブの問題と同時にセックスの問題が出ている。そこに新しい点がある。近代文学における男女の問題を大きく愛の文学でくるとすれば戦後の現代文学は総じてセックスの文学になっているわけですが、大ざっぱに言って、愛から性の問題へ移っていく端緒の問題があそこら出てきている。ともすると古臭い道学者的側面のみを強調される漱石の晩年の文学に、早くもきわめて現代的な要素が顔をのぞかせている。そういうこともあるわけです。(P.191)▽

④「妹婿の事は一時の驚ろき丈で、大した影響もなく済んだが、それぎりで後のなささうに思へた友達と彼との間には、其後異常な結果が生れた。

其時の友達の言葉と今の友達の境遇とを連結して考へなければならなかつた津田は、突然衝撃を受けた人のやう

に、眼を開いて額から手を放した。」

(一)、第四百十章に、次の如く、ある。

△夫人は津田のために親切な説明を加へて呉れた。彼女の云ふ所によると、目的の人は静養のため、当分其所に逗留してゐるのであつた。夫人は何で静養が其人に必要であるかをさへ知つてゐた。流産後の身体を回復するのが主眼だと云つて聴かせた夫人は、津田を見て意味ありげに微笑した。▽

(二)、この「友達」を、津田の、曾ての恋人・清子の、夫・「関」とする説が、早くからある。

①、岡崎義恵の、△「明暗」「硝子戸の中」の女▽（『漱石と微笑』、生活社、昭和二十二年（一九四七年）三月）に、次の指摘が、ある。

△関については何等記述される所がないが、津田が通つてゐた病院の待合室で、一人の旧友に逢ひ、晩飯を食ひながら、性と愛といふ問題についてむづかしい議論をしたといふことが第十七章に描かれてゐる。この友と津田は異常な關係を生じ、その友の言葉と境遇とを結びつけて考へると或衝撃を受けたといふ。この友が関のことではないかと云ふ説がある。若しこの男が関で、それが悪い病氣の為にこの病院に来てゐたとすれば、清子の湯治も悪疾の伝染した為であるかも知れず、関の不道德な生活も想像され、（P.194）▽

②、内田道雄の、△「明暗」▽（『日本近代文学』第5集、三省堂、昭和四十一年（一九六六年）十一月）に、次の指摘が、ある。

△この関なる人物について清子は、「朝から晩迄忙がしうにして」働いている氣の毒な人間であると語つてゐる（百八十八）。その語り口には清子の夫への関与の仕方の特徴は十分には匂つて来ない。ところが、「十七」で、津田が小林医院（これは、津田のような病氣の他、性病科を兼ねた病院であると推定される。）で、且てそこで出会つたことのある人物

として回想する二人の男の中の一人が関であるという推定（岡崎義恵「漱石と微笑」）が、僕には確實であると考えられる。それは、二人の中の他が妹婿の堀であったのに対して、「妹婿の事は一時の驚ろき丈で、大した影響もなく済んだが、それぎり以後のなさうに思へた友達と彼との間には、其後異常な結果が生れた。其時の友達の言葉と今の友達境遇とを連結して考へなければならなかつた津田は、突然衝撃を受けた人のやうに、眼を開いて額から手を放した。」という書きぶりにうかがえるのである。このような書き方は清子にかかわりのある人物を指し示す以外には考えられない重大な意味付けである。（P.76）

## 第十八章

### 初出

大正五年（一九一六年）六月十四日・「東京朝日新聞」  
大正五年（一九一六年）六月十三日・「大阪朝日新聞」

### 評釈

①「彼女は後ろ向になつて、重ね簞笥の一番下の抽斗から、ネルを重ねた銘仙の襦袍を出して夫の前へ置いた。

「一寸着て見て頂戴。まだ庄が好く利いてゐないかも知れないけども」

津田は烟に巻かれたやうな顔をして、黒八丈の襟のかゝつた荒い堅縞の襦袍を見守もつた。それは自分の買った

品でもなければ、拵へて呉れと眺へた物でもなかつた。

「何うしたんだい。是は」

「拵えたのよ。貴方が病院へ入る時の用心に。あ、いふ所で、あんまり変な服装をしてゐるのは見つともないから」

「何時の間に拵へたのかね」

彼が手術のため一週間ばかり家を空けなければならぬと云つて、其訳をお延に話したのは、つい二三日前の事であつた。其上彼はその日から今日に至る迄、ついで針を持つて裁物板の前に坐つた細君の姿を見た事がなかつた。彼は不思議の感に打たれざるを得なかつた。お延は又夫の此驚きを恰も自分の労力に対する報酬の如くに眺めた。さうしてわざと説明も何も加へなかつた。

「布は買ったのかい」

「い、え、是あたしの御古よ。此冬着やうと思つて、洗張をした儘仕立てずに仕舞つていたの」  
成程若い女の着る柄文に、縞がたゞ荒いばかりでなく、色合も何方かといふと寧ろ派出過ぎた。」

(一)、「良き妻」ぶりを發揮している、「けなげ」なお延が、居る。

①、第百五十三章、「退院の日の会話」に、次の如く、ある。

△「今度はお前の拵へて呉れた縹袍で助かつたよ。綿が新しい所為か大変着心地が好いね」

お延は笑ひながら夫を冷嘲した。

「何うなすつたの。なんだか急にお世辭が旨くおなりね。だけど、違つてるのよ、貴方の鑑定は」

お延は問題の縹袍を畳みながら、新しい綿ばかりを入れなかつた事実を夫に白状した。(中略)

「お氣に召したらどうぞ温泉へも持つて入らしつて下さい」

「さうして時々お前の親切でも思ひ出すかな」

「然し宿屋で貸して呉れる縹袍の方がずつと可かつたり何かすると、いゝ恥つ掻きね、あたしの方は」

「そんな事はないよ」

「いえあるのよ。品質が悪いと何うしても損ね、さういふ時には。親切なんかすぐ何処かへ飛んでつちまふんだから」

無邪気なお延の言葉は、彼女の意味する通りの単純さで津田の耳へは響かなかつた。其所には一種のアイロニーが顫動してゐた。縹袍は何かの象徴であるらしく受け取れた。多少気味の悪くなつた津田は、お延に背中を向けた儘で、兵児帯の先をこま結びに結んだ。▽

②、第百七十七章に、次の如く、ある。

△彼は煙草へ火を点けようとして枕元にある燐寸を取つた。其時袖畳みにして下女が衣桁へ掛けて行つた縹袍が眼に入つた。気が付いて見ると、お延の袍へ入れて呉れたのは其儘にして、先刻宿で出したのを着たり、自分は床の中へ入つてゐた。彼は病院を出る時、新調の縹袍に対してお延に使つたお世辞を忽ち思ひ出した。同時にお延の返事も記憶の舞台に呼び起された。

「何方が好いか比べて御覧なさい」

縹袍は果して宿の方が上等であつた。銘仙と糸織の区別は彼の眼にも一目瞭然であつた。縹袍を見較べると共に、細君を前に置いて、内々心の中で考へた当時の事が再び意識の域上に現はれた。

「お延と清子」

独り斯う云つた彼は忽ち吸殻を灰吹の中へ打ち込んで、其底から出るじいといふ音を聴いたなり、すぐ夜具を頭から被つた。▽

(二) ①、唐木順三の、△『明暗』論▽（『夏目漱石』所収、国際日本研究所、昭和四十一年（一九六六年）八月）に、次の指摘が、ある。

△津田は清子のゐる温泉宿で更に一人で反省してみる。このままでゐるか一歩ふみだすか。さうしてそれは延子のもたせてよこした襦袍と宿のそれとを比べてみる事から、清子と延子とを比較し始める。宿の襦袍の方が上等であるといふ結論は津田にとつてはただならぬものを意味してゐる。（P.15）▽

②、△鼎談▽（『漱石作品論集成 第12巻『明暗』』、桜楓社、平成三年（一九九一年）十一月）に、藤井淑慎の、次の発言が、ある。

△唐木さんので「襦袍」が出てくるところがありまして、要するに、延子がもたせた襦袍よりも、宿の襦袍のほうが上等であるというのがあつて、「宿の襦袍の方が上等であるといふ結論は津田にとつてはただならぬものを意味してゐる」というのがあつて、とてもセンスのある面白い指摘だと思ふのですが、これがあんまり発展させられていなくて、もつとこういうところを膨らませていくと、批評家や研究者の書く論文というものも面白くなるんじゃないかと思ふのですけど。（P.33）▽

第十八章、小説の、「第三日目」（金曜日）が、終わる。

附記 一、「明暗」本文中、○印は鳥井。

一、「明暗」本文の引用は、岩波書店刊『漱石全集 第七巻 明暗』（昭和四十一年六月二十三日第一刷発行）昭和五十一年六月九日第二刷発行）に拠つた。但し、旧字は、新字に改めた。

(平成十年九月二十八日)